グローバルスタディキャンプ IN フィリピン

活動報告書



2025



グローバルスタディキャンプ in フィリピン 2025

1986年からスタートしたフィリピンキャンプはその時のニーズや状況に合わせて、現地のユースと日本のユースが共に、活動を行っています。。2025年はグローバルリーダーシップ育成を目的に、日本、フィリピンの社会問題に目を向け、より良い社会になるために自分たちにできることについて考える、グローバルスタディキャンプを実施しました。文化、言語、宗教の違い越え、共に平和を担う仲間を作ることができ、彼らの今後の活躍を楽しみにしています。

Japanese campers	Tala Campers	Navotas campers
Sakura	Earnest	Joshuwa
Roro	Joshua	Arnold
Nana	Anton	Greg
Koshi	CJ	Ejet
Masaki	Steive	Jacob
Satoru	Lheo	Angelica
Risa	Jana	Crystal
Yuki	Roseanne	Han
Yui	Kliea	Veronica
Kony	Kristine	Monica
Chika	Nina	Izzy
Rick	Francesca	Bianca
A b	Manak	Class





- ・アイスブレイクアクティビティ
- ・小学校訪問
- ・小学生の家へ半日ホームステイ
- ・ウェルカムパーティ

自己紹介をした時すごく緊張した。みんなの視線が自分に向いたときは正直頭の中が真っ白になった。それでもなんとか言えたから良かった。名前を覚えるのも難しく大変だった。歓迎会では思った以上にみんなのクオリティーがすごかったのでびっくりした。特に劇がすごいなと思った。普通の人間じゃできないような技だったりとかだったのですごかった。ミニゲームなどでは大変なコミュニケーションが取りづらかった。日本人以外の人としゃべるのはあまりないことだから戸惑った。楽しい時間を過ごすことができた。

Kalinisan at A ay bahagi ng ami

8月9日



8:00 朝食

9:00 フィリピンキャンパーと レクリエーション

10:00 スラム街(Market 3)へ移動

11:00 子ども食堂でミーティング

12:00 配給

13:00 昼食

15:00 別のスラム街(Sawata)へ移動

16:00 スラムの子ども達と交流





8月10日



9:00 日本とフィリピンそれぞれの国の 社会問題についてのプレゼンテー ション 日本)貧困・環境 ナボタス)医療制度・若者の妊娠 タラ)麻薬中毒・ごみ

12:40 昼食

15:00 ミニ運動会

19:00 教会でミサ

20:00 夕飯



8月11日



朝、教会で朝ごはんを食べた後、バスでタラの病院に向かいました。

病院ではまず、ハンセン病について学ぶ講義を受けました。講義では、ハンセン病の歴史や症状、検査の方法について教えてもらいました。また、今一番の問題は、ハンセン病について正しい知識がないことや、患者さんに対する差別がまだ残っていることだと学びました。その後、ハンセン病の病棟を訪問しました。治療を受けている方々の生活を直接見ることができました。体が自由に動かせなくても、笑顔で過ごしている方が多く、とても印象的でした。

病院の見学が終わると学校に移動し、バレーボールをしました。グループの仲間と声を掛け合いながらプレーし、掛け声を合わせて応援もしました。また、私たちのバレーボールを観にキャンパー以外の大学生も来てくれて仲良くなることができました。フィリピンの大学ではどんなことが学べるかなど興味深いお話を聞くことができました。

バレーボールが終わると、タラのメンバーの家に向かい、一晩ホームステイをしました。シャワーの使い方や食事の仕方など、日本の生活とは違う部分があり、フィリピンの生活を体験できました。

私のホームステイ先はお店をやられているご家族だったため、店番に挑戦もしました。夜にはフィリピンのゲーム「SOSゲーム」をしたり、おしゃべりを楽しんだりして、充実した時間を過ごしました。

この日は、フィリピンの生活や文化を肌で感じられる、 とても充実した一日でした。



8月12日



8:00 ホームステイ先から学校へ集合

9:00 小学校の授業見学

10:00 スナックタイム

11:00 ショッピングモールへ移動

13:00 昼食

14:00 ショッピングモール出発

16:00 国立自然史博物館

(National Museum of National History)

18:00 ショッピング

21:20 夕食



8月13日



8:00 朝食 ドラゴンフルーツ、 グレープフルーツ、 ベーコン、卵、焼きバナナ、 白米、パン、ナゲット

10:00 ゲーム ジェスチャーゲームや人数言われ てその人数ごとに座るゲーム

11:00 書道 4人グループに分かれて書いても らったり、名前や好きな言葉を 書いたり

13:00 昼食

14:00 準備 ソーラン節や歌の練習、 お好み焼き作り

18:00 夕飯 作ったお好み焼きを皆で食べる

2 1:0 0 フェアレルパーティー それぞれダンスや歌、劇を披露。 写真撮ったり、プレゼントを貰っ たり。 最後の時間を楽しんだ。



YMCAフィリピンボランティアキャンプ 一日本では体験できない、一生に一度の出会いと学び一

高城 那奈

2025年夏、私はYMCAが主催するフィリピンボランティアキャンプに参加した。参加者は日本人キャンパー、ナボタスキャンパー、タラキャンパーがそれぞれ約13名ずつ。期間は一週間。フィリピンのスラム街での支援活動、ハンセン病患者との交流、そして現地の若者たちとの深い関わりを通して、私は「人と人とのつながり」や「生きることの意味」について、これまでにないほど深く考える機会を得た。

ここでは、私が体験した一週間の出来事を振り返りながら、日本では決して得られないような学 びと感動について綴っていきたい。

キャンプの中で最も記憶に残っているのはナボタスのスラム街を訪れた時のことだ。そこは、テレビやネットでしか見たことのないような現実が広がっていた。狭い路地、壊れかけた家々、裸足で走り回る子供たち、自由に歩き回る猫や犬たち。最初は言葉を失い、これが現実なのだと信じられないような気持になった。けれど、そんな環境の中でも小さな子供たちは笑顔で私たちを迎えてくれた。

私たちはおかゆを配布したり、折り紙を教えたりした。折り紙は予想以上に人気だったし、掛け算の問題を子供たちに出されてすぐに答える私に興味津々になってくれた姿は本当にかわいくて愛おしくて日本に連れて帰りたくなるほどであった。言葉が通じなくても、笑顔とジェスチャーで心が通じ合う瞬間が何度もあった。日本では、食べ物を配るという行為が「特別なこと」になることは少ない。けれど、ここでは一杯のおかゆが「命をつなぐもの」になるのだ。その重みを私は直接この肌で感じることができた。

別の日には、ハンセン病について学ぶ機会があった。事前に講義を受け、病気の歴史や偏見について知った上で、実際に患者さんと交流する時間が設けられた。正直、最初は怖かった。病気に対する無知と偏見が、自分の中にもあったことに気づいたからだ。けれど、患者さんたちはとても穏やかで、優しく、私たちの訪問を受け入れてくれた。フィリピン人から「ここには家族に捨てられて一人ぼっちの患者もいるんだよ」と言われ、病気ではなく「人」として向き合うことの大切さを私はこの日初めて本当の意味で理解した。

キャンプの中盤から後半にかけては、ナボタスやタラからのキャンパーたちと交流を深める時間が増えた。運動会、バレーボール、お泊まり会など、活動は盛りだくさんだった。英語が母国語ではない私に対して、彼らは本当に優しかった。ゆっくり話してくれたり、何度も聞き返してく

れたり、ジェスチャーで助けてくれたり。会話が続くようにたくさん質問してくれる姿勢に、 私は何度も救われた。特に印象的だったのは、夜のお泊まり会での語り合いである。文化の違い、家族のこと、それぞれの国での問題。話すうちに、言葉の壁を越えて「心」でつながっている感覚が芽生えた。

ただ、仲良くなれたのが旅の後半だったのが本当に惜しいなと思う。もっと早く打ち解けていたら、もっとたくさんの思い出が作れたかもしれないと思うし、今すぐにでも皆に会いたい。そう思えるほど、大切な仲間ができた。そしてそれはフィリピンメンバーだけでなく、一緒に旅した日本人もである。

この一週間で、私の中には大きな変化があった。「支援する側」と「される側」という一方的な関係ではなく、「共に生きる仲間」として人と向き合うことの大切さ。言葉が通じなくても、心は通じるということ。

そして、どんな環境でも人は笑顔を持ち、優しさを持ち続けられるということ。日本では、日常の中で「生きることの意味」や「人とのつながり」について深く考える機会は少ない。けれど、このキャンプでは、それが毎日のように突きつけられた。それは、まさに「一生に一度の体験」だった。

フィリピンで過ごした一週間は、私にとって宝物のような時間だった。出会った人々、交わした言葉、感じた温もり。すべてが、これからの人生の指針になると思う。この体験を通して、私は「世界は広い」と実感した。そして、「人はどこにいても誰とでも心を通わせることができる」と信じられるようになった。これからも今回の経験を胸に人とのつながりを大切にしながら生きていきたい。

そしていつか、また皆に会える日を心から願っている。

後藤 里彩

私がグローバルキャンプNフィリピンに参加して強く印象に残っている活動は、小学生の1日を体験する活動です。日本人は私ひとりで英語も苦手だったので不安でしたが、お家に行ってみるととてもあたたかく迎えてくださり、家族のように接してもらえました。お昼ご飯ではフィリピン料理で有名なアドボを食べ、一緒に折り紙をしたりジャックストーンをしたりして、言語の壁を乗り越えて打ち解けることが出来たと思います。帰りにはお昼に食べたトゥロンが美味しかったですと伝えたら、「また来た時は必ず作るね」と約束してくれました。さらに、「フィリピンには家族がいることを忘れないで、また家においで」と言ってくれて、本当に心が温かくなりました。最終日のさよならパーティーでは、この日に一緒に撮った写真を額縁に入れてプレゼントしてくれて、とても嬉しかったです。フィリピンでの思い出が詰まった私にとってとても大切な宝物です。

また、スラム街での食糧配給も強く印象に残っています。普段、高校生のボランティアグループに所属し、子ども食堂などの活動を行っていますが、フィリピンのスラム街では日本とは全く異なる深刻な問題があることを知りました。特に、麻薬中毒が大きな問題となっていたり、子どもたちが十分な教育を受けられなかったりする現実を目の当たりにしました。実際にその環境で暮らす人々と関わる中で、日本での活動との違いを強く感じると同時に、自分がこれからどのように行動していくべきかを深く考えるきっかけにもなりました。

さらに、日本とフィリピンの課題について発表するプレゼンテーションも大切な経験でした。それぞれの国の大きな問題を共有し、今まで知らなかったことを知る貴重な機会となりました。フィリピンの人たちのプレゼンでは、環境問題(日本と同じようにレジ袋の有料化が進められていること)、麻薬中毒、健康問題、そしてゴミ問題など、日常生活に深く関わるテーマが多く取り上げられていました。特に麻薬中毒や健康問題については、日本とは異なる深刻さを感じ、自分たちが当たり前だと思っている環境のありがたさにも気づきました。それぞれの課題について考えることで、多くの学びを得ることができ、友達や家族にも共有したいと思いました。自分自身もこれから、社会問題に対してもっと深く考えていきたいです。

ホームステイの前には、タラにある病院を訪れ、ハンセン病について学びました。現地の方からハンセン病の歴史や、過去に患者の方々が受けてきた差別について話を聞き、正しい知識を持つことの大切さを実感しました。病気そのものよりも、偏見や誤解によって苦しむ人が多かったことを知ることができたことが大きな学びとなりました。その後のホームステイでは、学校が終わったあとにどのように過ごしているのかを実際に体験し、日本との違いをたくさん感じました。シャワー室には水道の蛇口がなく、大きなバケツを持って外まで水をくみに行くそうです。家の中の様子も日本とは全く違っていて、天井を見上げると木の板でできており、

隙間から2階で生活している人の姿が見えました。その光景が少し怖く感じたのを覚えています。床はコンクリートで、壁は木の板を布で覆っていて日本の家とは全く違う環境で初めは驚きや戸惑いが大きかったです。また、滞在中に一度停電があり、初めは驚きましたがこのようなことが日常だということを教えてもらいました。日本では当たり前のようにある電気や水が、実はとてもありがたいものなのだと改めて感じました。ホームステイ先では折り紙をしたり、お菓子を買いに行ったりと楽しく過ごすことができ、フィリピンの家庭の温かさを感じることができました。

私は初めての海外で不安が大きかったですが、実際に行ってみるとフィリピンの方はすごく優しく話しかけてくれたので、そのおかげでコミュニケーションが取れて仲良くなることができました。そして、フィリピンで過ごした1週間は、新しいことに挑戦する勇気をくれました。この経験を通して自分に自信がついたと思います。自分が思っていたことを英語で伝えることが出来ずに悔しい思いもしましたが、それ以上にこのキャンプでは多くの学びがありこのキャンプに参加して本当によかったと心から思っています。異なる文化や価値観に触れながら一緒に過ごした時間は、一生忘れることのない大切な思い出になりました。今回の経験を将来に活かし、勇気を持ってこれからもたくさんの新しいことに挑戦していきたいです。みなさんと出会えて本当によかったです。





坂口 理久

今年の滞在は僕にとって二度目の海外渡航で、一度目は一年前にアメリカに滞在したときだった。そのため、正直に言うと今年の旅行前はアメリカへ行ったときと比べてあまり乗り気ではなかった。衛生や治安の面で不安があったのが主な理由だったと思う。実際、ゴキブリと一緒にお風呂に入ったし人生で一番の悪臭を感じたときもあったが、そんなことはなんでもないと思えるほどフィリピンは力強かった。

「パリピ」というのはフィリピン人を形容するのに最適な言葉だと思う。頭がおかしいとかではなく、"party people" という意味である。地域や環境によって大きく変わるとは思うが、家にカラオケマシンがあって、滞在した教会の集まる部屋では毎晩カラオケ大会をしていた。近くの学校ではもうすぐダンスのテストがあるらしく、道で子供たちがキレッキレのダンスを練習していた。みんな盛り上げるのがうまいし、どんなにしょうもないミニゲームでも全力で、一喜一憂しながらはしゃいでいた。参加したフィリピン人のキャンパーは大学生だったが、思春期前の子供のような遊び心と無邪気さがあった。僕はもともとそういう性格、つまり精神年齢が低く、全力で遊んで楽しむ人だったので、僕のための国なんじゃないかと思うくらい楽しかった。リーダーの小野寺さんにはめちゃめちゃフィリピン人だったよ、と言われた。

今回行ったスタディキャンプは本当に素晴らしいと思う。というのも、楽しかったのと同時にとても学びのあるものだったからだ。もともとフィリピンにはバナナのイメージしかなかったが、いまは何倍も詳しく語れる。東京にも治安の悪い場所はあるが、スラム街はそれとは異なり、人権とか健康で文化的な最低限度の生活とか、そういう国の手が全く行き届いていないような、日本には存在し得ないような場所だった。人馴れした野生の犬や猫が大量にいて、小さな赤ちゃんはぬかるんだ地面に座っていた。衛生面だけでなく、家が傾いていたりしていた。しかし驚いたのは、子供たちと交流したときに彼らは満面の笑顔で、いきいきとした姿を見せてくれた。スラム街に限らずフィリピンの町の子供たちはいつでも楽しそうに、知らない子供でも構わず遊んでいた。僕はフィリピンの貧困や環境の問題を目の当たりにしたのと同時に、経済的に貧困でも全力で今を楽しむフィリピン人の子供たちの姿勢を学んだ。

このスタディキャンプをする前に日本の貧困について調べる活動として近くの子ども食堂に行って経営者の方からお話を伺ったりした。その時に聞いたのが、日本で問題となっている貧困は、貧困と聞いて多くの人がイメージするような、食べ物に困ったり家がなかったりするような貧困(=絶対的貧困)ではなく、地域の人や家族、友達など他者とのつながりが薄れることによる「心の貧困」なのではないか、ということだった。日本の文化では他人に話しかけることはないし、コロナウイルスの影響もあって地域で交流する場面も減ってしまった。このようなことによって他者とのつながりが薄れて孤独を感じる人が多いそうだ。僕は、「心の貧困」という面で見るとフィリピンの方が良い状況なのではないかと思った。おそらく、機械化、システム化していないことによって地域が協力しなければ成り立たない社会になっているから、また「とりあえず今を楽しもう」というマインドがフィリピン人の中にあるからなのではないかと思った。はたしてお金持ちになること、経済状況を向上し先進国化することが本当に人々を幸福にするのか、疑問に思った。

フィリピンでの経験が教えてくれたこと

市川 侑樹

フィリピンの方々との交流を通じて、さまざまな学びや気づきを得ることができました。

まず印象に残ったのは、フィリピン人の人柄です。とても楽観的で今を全力で楽しみ、誰とでもすぐに仲良くなれる温かさを持っていました。日本語を一生懸命話そうとしてくれたり、私が英語を聞き取れないときには簡単な英語に言い換えたり、翻訳機を使ってくれたりと、一生懸命にコミュニケーションを取ろうとしてくれる姿勢に感動しました。たくさん話しかけてくれる中で、フィリピンの文化や社会についても詳しく説明してくれ、理解を深めることもできました。

さらに、日本とフィリピンが抱えている問題についての話し合いも印象的でした。最初はフィリピンといえば貧困が最大の問題だと考えていましたが、実際には10代の妊娠や衛生環境といった課題が大きいことを知り、想像との違いに驚きました。また、フィリピンにはあって日本に足りないもの、日本にはあってフィリピンに足りないものがそれぞれあり、互いに協力し合うことでお互いの課題解決の糸口が見えてくるのではないかと感じました。

置かれた環境の違いについても考えさせられました。フィリピンの学生は大学に通っているといっても選択肢が少なく、自分の好きな専門分野を自由に学ぶことが難しいそうです。その話を聞いて、私は今、好きな分野を自由に学べる恵まれた環境にいることを改めて実感し、感謝の気持ちが湧きました。そして、学んだことを世の中に貢献できるようにもっともっと努力したいと思いました。

また、フィリピンの人たちがそれぞれの環境の中で一生懸命に生きている姿を知り、自分も日本で頑張ろうという気持ちを強く持つことができました。限られた環境でも前向きに努力している姿から大きな刺激を受け、私もこれからの生活をより充実させたいと感じました。

今回の交流を通じて、価値観が大きく広がりました。これからも積極的に国際交流に取り組み、世界とつながりながら学び続け、自分自身を成長させるとともに、世界に貢献したいです。

松本 向史

フィリピンでの5日間は、私の心に深く刻まれる貴重な時間となりました。初めて訪れる異国の地で、私は現地の文化、人々の温かさ、そして抱える社会問題の現実を肌で感じることができました。それは、日本の日常では決して味わうことのできない、光と影が交錯するような体験でした。

初日の朝、チョコレート粥とココナッツミルクという異文化の朝食から私の一日は始まりました。日本と同じくらい美味しいバナナに驚きながら、スパムのような肉料理も味わいました。そして、皆で輪になって名前を覚えるゲームは、私の拙い英語にも優しく耳を傾けてくれるフィリピンの人々の温かさに触れる最初の機会となりました。小学校を訪問した際には、30人以上の子どもたちが一つの教室で学ぶ姿を目にしました。そこでは空調設備がない中一生懸命に授業をしている子どもたちを見て日本の環境との違いを大きく感じました。そして、交通ルールを守らずに走るバイクや自転車、痩せ細った犬や猫が多い道、そしてギリギリの状態で建つ家がたくさんありそこには、貧困の現実が横たわっていました。しかし、ジロー君の家で食べたシニガンスープと魚のフライの昼食、そして食後のバドミントンやバレーボール、バスケットボールで遊ぶ時間を通して、子どもたちの屈託のない笑顔と、困難な状況の中でも明るく生きる人々の強さを感じることができました。英語がうまく聞き取れなくても、皆が優しく、分かりやすい単語で教えてくれたことは、本当に心強く、言葉の壁を越えたコミュニケーションの喜びを教えてくれました。「Miss you」というジロー君の言葉は、短くも深い別れの寂しさとともに、彼との心の繋がりを実感させてくれました。

夜にはミサに参加し、言葉は分からなくても、人々の信仰心の厚さに触れ、温かく美味しいミサのご飯は、体だけでなく心も満たしてくれました。そして、私たちのために披露されたダンスや合唱、老若男女が一体となって楽しむウェルカムパーティーは、フィリピンの人々のホスピタリティと陽気さを象徴するようでした。特に、薬などで地に落ちながらも這い上がるダンスには深い感動を覚えました。

2日目以降、私たちはフィリピンが抱える社会問題について深く学びました。炊き出しの現場で見た、満足に食事ができない多くの人々。政府の支援が十分に届かない現状や、トタンや傘で補強されたボロボロの家々が並ぶスラム街の匂い、そして生魚の臭いが混じり合う魚市場の生臭さは、その地域の過酷な生活環境を物語っていました。スリや盗難が多いという情報も、貧困が引き起こす社会のひずみを教えてくれました。7歳から働き、10代で妊娠・出産する子どもたちの現実、麻薬やドラッグが蔓延する地域、そしてゴミが散乱し、衛生環境が悪い現状は、日本とは全く異なる厳しい現実でした。しかし、そうした中でも子どもたちは明るく、フレンドリーで、

私たちとのダンスや折り紙、チーズ味のアイスを通して、純粋な交流を楽しむことができました。彼らの笑顔は、どんな困難な状況にあっても希望を失わない強さを持っているようでした。

3日目のディスカッションでは、10代の妊娠・出産、麻薬中毒、医療問題、そしてゴミ問題という、フィリピンが直面する具体的な課題について深く掘り下げました。コンドームを禁止するカトリック教会の教義と、結婚前の性行為による若年妊娠の現実との間に横たわる大きなギャップ。マリファナやシャブに手を出す貧困層の人々の背景。そして、医療従事者の不足や公共病院の設備不足による医療崩壊の危機。ゴミの分別意識の欠如が引き起こす洪水や感染症のリスク。これらの問題は、一朝一夕には解決できない根深いものであり、教育、意識改革、そして政府と地域の協力が不可欠であることを痛感しました。

ディスカッション後に行われた運動会は、チームに分かれての風船割り、綱引き、卵投げ、フルーツ渡し、袋ジャンプと、汗を流しながら皆で一体感を深める貴重な時間でした。体格の大きなフィリピンの人々との綱引きでみんなで強調して一度だけ勝てた時の喜びはフィリピンの人と心まで繋がった感覚でした。夜には歌やダンスで盛り上がりました。その日の夜、フィリピン最大のマーケットであるサンアンドレス・パブリックマーケットへ行きました。活気あふれるマーケットで見た、幼い子どもたちが荷物を運んだり物を売ったりする姿は、貧困が子どもたちの労働に繋がっている現実を改めて突きつけました。しかし、そこで食べたロンガンというフルーツはとても美味しく、また日本のリンゴも売られていることに、意外な繋がりを感じました。

最終日、ハンセン病の病院に行き講義を受けました。そこでは、ハンセン病が「らい病」とも呼ばれる細菌性の病気であり、主に皮膚、神経、目に影響を及ぼすこと、そして空気感染するものの、長期にわたる密接な接触がなければ感染しないことが説明されました。最も衝撃的だったのは、「ハンセン病は非常に伝染性が高い」という誤解が根強く存在するという事実です。握手や会話、隣に座る程度のカジュアルな接触では感染しないという事実を知り、これまで抱いていた漠然とした恐れや偏見がいかに根拠のないものであったかを痛感しました。

その後、高校の校庭でバレーボールをしました。フィリピンの人々のバレーボールの強さに驚きながらも、皆でスポーツを楽しむ時間は、心を通わせる大切な瞬間でした。

そして、今回のキャンプの目的でもある、「フォーメーション」という協調性を育むこと、そして「ソーシャルサービス」を通じて心の中にインスピレーションを得ることの重要性を学びました。この5日間で、私はフィリピンの豊かな自然、陽気で心優しい人々、そしてその裏に隠された厳しい社会の現実を目の当たりにしました。

疲労困憊の日々でしたが、ジロー君からの「Miss you」の言葉、アンジェやジェシカ、そしてエジェとの交流、運動会での一体感、マーケットでの体験、そして何よりも、どんな時も優しく接してくれたフィリピンの人々の温かさが、私の心を深く満たしてくれました。

今回の経験は、私がこれから社会に出る上で、物事を多角的に捉え、目の前の現実から目を背けずに、自分に何ができるかを考える大きなきっかけを与えてくれました。フィリピンで出会ったすべての人々、そしてそこで見た光と影は、私の人生において忘れられない宝物となるでしょう

星野 千佳

グローバルキャンプINフィリピンに参加して、学ぶことが沢山ありとても良い1週間を過ごせることが出来ました。

言葉や食べ物、日本とは全く違う環境で行く前は不安しかなかったですが、実際行ってみたらそんな不安を忘れることが出来るくらい楽しみながら様々なことを学べて行ってよかったと思いました。特に印象に残ってる活動が2つあります。

1つ目はスラム街での子ども食堂です。2つの場所のスラム街へ行き、子供たちにカレーとおかゆを配りました。普段の生活では触れる事の無い環境で、狭い場所で多くの人が住んでいました。そこには薄いTシャツを着て裸足やサンダルで走り回る子供たちが大勢いました。私たちがご飯を配り始めるとすぐに子供たちは集まり、おかわりに来る子供たちもいて沢山食べて喜んでくれてる姿を見て嬉しかったです。また、「ありがとう」と日本語で感謝を伝えてくれた子達がとても心に強く印象に残りました。食事の後は踊ったり話したりと楽しい時間を共有でき、言葉が違っても心で通じ合えることを実感し、子どもたちの無邪気な笑顔に癒されました。

2つ目はハンセン病についてです。

実際にハンセン病の病棟に行って、直接患者さんと交流をしました。ハンセン病は長い間「不治の病」、「恐ろしい病気」と誤解され、偏見や差別がまだ残っていることを学びました。患者さんの中にはハンセン病にかかったことで家族に見捨てられ会えてないという方もいてとても心が痛みました。現在は感染力も弱く日常生活で感染する可能性はほぼないので偏見や差別を無くしていく事がとても大切だと思いました。別の日にはフィリピンと日本で各国の課題を発表し合う活動があり、フィリピンの麻薬中毒やゴミ問題なども学びました。

7日間の活動の中では、キャンプのメンバーでミニ運動会や、博物館に行ったりしてまた、ホームステイでフィリピンキャンパーとも長い時間交流できて、とても楽しみながら学ぶことが出来て良かったです。私は英語が苦手でとても不安だったのですがみんなとても優しくてフレンドリーだったのでとても仲良くなれることが出来ました。

サポートしてくれた皆さんと、キャンパーの方にとても感謝の気持ちでいっぱいでほんとに出会 えてよかったです。

〜眠れなかった夜から始まったフィリピンキャンプ〜

渡邉 琴実

私は今回で海外が4回目でしたが、フィリピンは初めて行く国だったので渡航する前は強盗や 狂犬病などさまざまことが怖くてフィリピンへ着いてからの初めての夜は全く眠れませんでし た。しかし次の日から現地の人たちに初めて会ってからは私たち日本人を暖かく迎えてくださ ったフィリピン人の優しさで緊張が解けました。フィリピンに着いてからの活動は社会福祉士 を目指している私にとってどれも学びがいのある活動ばかりでした。

まず、フィリピンに着いてから2日目の活動は小学校訪問をしに行ったこととナボタスに住んでいる人たちの家に訪問してお昼ご飯を食べに行きました。小学校に訪問しに行ったときは、日本の学校とは異なり窓や壁がなく、雨天時に授業が困難になる環境や衛生面に不十分なトイレ事情を見て、子どもたちの学習環境の厳しさを実感しました。ナボタスの家に訪問した時は家が想像以上に狭くすごく過ごしにくかったのと、家に行くまでの道がデコボコしていて日本では想像できない生活ばかりで衝撃的でした。

3日目はマニラのスラム街を訪問しに行きました。2日目に訪問したナボタスの家と同じく家の幅が狭く不衛生さ、道路や交通の危険さを目の当たりにしました。また、現地の人から麻薬戦争による多くの犠牲者の話を聞き、貧困層への不平等な扱いに衝撃を受けました。スラム街での子供たちへの食事配布ではおかわりを子供たちが要求してきてもほかの子供たちに配る食料がなくなってしまうので配らないでと現地の学生に言われてしまったので、貧困層での食料不足の現実を体験し、複雑な思いをしました。

4日目のプレゼンテーションでは、日本とフィリピンの発表を通して、10代での妊娠と薬物中毒の問題を学びました。避妊教育の不足や貧困層での薬物乱用など、日本との共通点や違いを知り、性教育や地域活動の重要性を再認識しました。

5日目のハンセン病施設訪問では現地の医師から感染症や診断方法、治療法を学び患者さんの差別や孤立の現実を知りました。患者さんとの交流を通じてハンセン病の正しい知識と偏見を簡単にしてはならないということを学びました。ホームステイでは私が泊まった家は両親の職業が医者と英語教師だったのでゆとりのある環境で生活できましたが、ほかの家は扇風機が1個しかない家やシャワーのない家がほとんどだったので生活の格差と日本との環境の違いを強く実感しました。

6日目では日本の書道とお好み焼きを体験していただきました。日本文化や日本食を通じて日本文化を知るための第一歩になったという方がいたり野菜が高騰している中で野菜がたっぷり入った料理を食べられるのがうれしいと言っている方がいたりと文化と食を通じて日本のことをさらに知ってもらえて嬉しかったです。

このフィリピンでの活動を通じて、フィリピンの貧困問題や文化、医療の実態を学ぶことができました。また、私は英語をあまり話せないまま渡航したので私の英語がきちんと伝わるか不安でしたが現地の人々の親切なサポートもあり、無事にボランティアを終えることができました。支え合いと感謝の大切さも学ぶことができたので今後もこの気持ちを忘れずにしていきたいと思います。

宇塚 正希

フィリピンに行ってまず感じたことは、日本より空気が穏やか、人々が時間に追われていないということです。なんだか、とても安心しました。これぞ実家のような安心感という感じです。

そして、フィリピンに行って数日、様々な体験をしました。学校に行ってみたり、ホームステイしたり、ハンセン病について学んだり。学校に行ってみた際は、日本とは少し違えど、しっかりとした学習環境が整っていました。しかし、エアコンがないのは驚きました。ですが、エアコンがそこまで必要ではない程の気温だったので、羨ましいなと思いました。

ホームステイでは、バディ?の家に行ってお菓子を買いに行ったり、アイスを食べたり、みんなで自国について話したり、とても有意義な時間を過ごせたと思います。そこでも、日本とは多少違う文化が見られ、とても面白かったです。

あとは、やっぱりアドボが美味しかった。フィリピンのご飯は普通に美味しいです。しっかり とした味わいで、また食べたいなという気にしてくれます。

また、フィリピンでできた友達と語らうのもとても楽しかったです。言語が違えど、そんなの は関係なく、友情を育むことができたと思います。

これを生かして、自分は様々な国の人と関わっていきたいなと思います。また行きたいなぁ、フィリピン。

今回2025グローバルキャンプinフィリピンに参加してみて

藤本 結衣

グローバルキャンプに参加した数日間は、私にとって忘れられない体験となりました。最初は 言葉の壁で緊張や不安もありましたが、プログラムを通して多くの学びと出会いがあり、毎日 が新鮮で刺激的でした。その中でも私が印象に残った体験を2つ紹介します。

1つ目はスラム街でのご飯配りです。私たちは細い道あるスラム街でご飯に困っている子供たちに向けてご飯を炊き出しを行い、おかゆを配りました。ご飯を貰いにくる子供たちの笑顔には光が溢れていてスラム街にいる子供たちにも日本の子供たちと同様に日常に楽しみがあることを肌を実感しました。子供達と触れ合う機会があったのですが日本の紙風船が大人気でした。

2つ目は病院(DR. JOSE N. RODRIGUEZ MEMORIAL HOSPITAL)に行き、

ハンセン病について学びましたハンセン病は昔、不治の病とされてきましたが現在では正しい 治療することで治すことができ、簡単にうつらないと明言されました。しかし様々な誤解や偏 見、間違った情報により患者さんは差別されています。私たちは実際にハンセン病患者の療養 所に行き直接お話をし果物を配りました。特に印象的だったのは私が行った患者さんには個室 があり、壁には沢山の絵が並べられていて趣味を楽

しめるプライベート空間があったことです。病気の治療だけでなく心のケアや生活の充実さも 大切だと感じました。

私は今回のグローバルキャンプを通じて日本にいると貧困や病気の差別や偏見といった問題はあまり日常で感じることが少なく、想像しづらかったのですが実際に現地の人と触れ合うことで、いまフィリピンに起きている問題を身近に感じることができました。生活の質は決して高いとは言えないにも関わらず、多くの人が明るく前向きに生きている姿がとても意外であり、強く心に残りました。

今回のグローバルキャンプでの経験や出会いは一生忘れられない宝物であり、これからもずっと大切にしていきたいと思います。





北澤 桜

私のこの夏最大のチャレンジは、とちぎYMCA主催の「グローバルスタディキャンプINフィリピン」に参加したことだ。このキャンプに参加することを決めた理由は主に二つある。一つ目は、母が若い頃にフィリピンで仕事をしたことがあり、現地の人々と仲良くなった話を小さい頃から何度も聞き、フィリピンという国に親しみを抱いていたからだ。二つ目は、実践的な英語を話したかったからだ。私は中学生のころ父の仕事の都合でフィジーに1年間住んだ経験がある。しかし帰国後は英語のネイティブスピーカーと話す機会が減り、英語力が落ちていないか試したいと思ったことも大きな理由だった。

フィリピンで視野が広がったと感じた出来事は、マニラのスラム街を訪れ、おかゆの配給を通して子どもたちと交流したことだ。訪れる前は、電気や水もない貧しい生活を想像し、不安を抱いていた。だが、実際は食べ物の屋台などが並び、子どもも大人も笑顔で挨拶をしてくれて、心が温かくなった。特に驚いたのは、人々が日本人より幸せそうに見えたことだ。私はこれまで、物や経済の豊かさと人の幸福度は比例すると考えていた。しかしフィリピンでの活動を通して、必ずしもそうではないことに気づいた。食べ物や洋服など物質的な不足があっても、家族や友達とのつながりを大切にしているのが伝わってきた。

私は将来、国際協力に関する仕事がしたいと考えている。このフィリピンでの経験を通じて、国際協力のあり方について考えが深まった。ただ物資を届けるだけでなく、現地の文化や生活を理解し、人々が自立して暮らせる仕組みづくりが必要だと気づいた。例えば、スラム街では親が教育を受けていないために子どもも教育を受けられず、貧困が続いてしまうという悪循環がある。だからこそ、子どもへ学習道具だけを配布して終わるのではなく、その親たちにも教育の大切さを伝えることが大切だと考える。

最後に、このスタディキャンプを通して多くの学びを得られたのは、小野寺さんや現地コーディネーターであるグエンとモンチをはじめ、一緒に活動してくれた仲間、そしてナボタスやタラから参加してくれた大学生の方々のおかげだ。フィリピンの食べ物やお風呂の入り方など、不安や戸惑いを感じる場面も多くあったが、みんなが明るく励ましてくれたからこそ乗り越えることができた。フィリピン人の大学生から伝統的な手遊びを教えてもらったり、一緒にカラオケやダンスを楽しんだりした時間は、かけがえのない大切な思い出となった。キャンプ中のささいな会話や、互いに助け合った経験の一つひとつが、私にとって成長する機会となった。

このキャンプにかかわってくれた全ての方々に心から感謝するとともに、このフィリピンでの経験を探究活動など、将来に生かしていきたい。

フィリピンで学んだこと

船田 哲

約1週間フィリピンに行って学んだことは主に3つあります。1つ目は人の温かさです。海外旅行が初めてだった僕はとても緊張してました。何をすれば良いか戸惑っていました。正直1人でもなんとかやっていけると思いました。でも現実は違いました。1人じゃ何もできせんでした。人に頼ってばかりでした。僕は日本人キャンパー誰よりも影が薄い存在だと思ってました。それでもフィリピンのキャンパーたちはそんな僕でも優しく話しかけてくれました。本当に嬉しかったし助かりました。みんな元気だったので僕も元気をもらえました。フィリピンのキャンパーは僕だけでなくみんなを一人一人気遣ってくれているなと思いました。それがわかったのは最後でした。みんなとの別れに寂しく悲しくなりました。それは僕だけでなくフィリピンのキャンパーも一緒です。そこでこれは使命ではなくて本当に心からの寂しさだったのだと思いました。使命を乗り越えてた先に熱い友情ができたのだと思いました。ありがとうの一言につきます。

2つ目は貧困問題です。最初フィリピンではあまり貧困問題は酷くないと思っていましたがそれは想像を超えてきました。僕が見た景色はドロドロの中を貧しく生活している光景でした。僕は胸が痛くなりました。なんで僕とこの人たちは違うのかと思いました。臭いも鼻が痛くなる臭いでした。それでも人々は生きていくために働いてました。服を着ていない少年少女もいました。辛かったけど僕ができることはないかと思いました。そしてその後の活動でたくさん働きました。おかゆを配ったり子どもたちと一緒にご飯を食べて、話して、今までよりは元気になってくれました。それでも僕の力不足だと思いました。僕だけの力じゃみんなを幸せにできない、ほんのひと時しかと思いました。それと能力不足でした。僕はあまり英語が話せなくて子供たちの本当の気持ちが分かりませんでした。僕はもっと頑張ろうと思いました。みんなのために。

3つ目は街並みです。日本と違うのは当たり前ですがものだけでなく雰囲気も違いました。日本よりホコリっぽく犬や猫がそこら辺にいました。乗り物も不思議なものがありました。バイクや自転車にかごがついていてその中に乗るなどの不思議な乗り物でした。狭いだけで居心地は悪くはありませんでした。ビルなどは空港近くしかあまり建っていませんでした。その他の建物などは造りがレンガみたいでした。昼食時に建物に入ったときはその建物はとても狭かったです。日本だと人が1人寝れるかどうかの部屋のスペースでした。本当に生活するのが大変なのだと思

いました。そういう経験ができて良かったと思います。それとホームステイの時には浴室にシャワーがなくてそれも水しか大きな桶に入ってないという環境でした。水は冷たいし浴室の中にはゴキブリなどの虫が入っていました。正直衝撃的でしたがある程度は想像以内でした。商店街などは衛生面が良くなかったです。卵などが割れていながらも売っていたし、魚も手入れしていない感じでした。学校の机はとても小さくて勉強がしづらいと思いました。こうしたことから病気が流行ったりするのだと思いました。ショッピングモールでは警備が頑丈でした。犯罪者も多いということだということでした。これまでのことで治安が良くないのと環境が整備されていないということだということでした。これからも自分よりつらく苦しい人たちがいることがいることを忘れずに頑張りたいです。

大垣 さくら

私は海外にも行ったことがなく、このフィリピンキャンプに参加するのは正直とても不安でしたが、実際に行ってみるとフィリピンの方々はとてもフレンドリーで優しくて、言語こそ違かったものの、互いに心で通じ合いこの先一生忘れることの無い素晴らしい思い出を作ることが出来ました。私がフィリピンキャンプを通して特に印象に残っている活動が3つあります。

1つ目はスラム街での食料配布です。

初めスラム街に行くのはとても不安が大きかったのですが、フィリピンのキャンパーの方々が優しく一緒に行動してくれて安全に食料を必要としている方々に食べ物を配布することが出来ました。私は毎月1回高校生ボランティアグループつぼみで子ども食堂を行っているのですが、フィリピンのスラム街で食糧配布を行ってから、日本とフィリピンの子ども食堂の違いに気づき、これからに活かしていこうと思いました。

2つ目はフィリピンと日本のそれぞれの国についてのプレゼンテーションです。私は日本の相対 的貧困と絶対的貧困について英語でパワーポイントを作り、プレゼンテーションをしました。 フィリピンの方々の前で英語でプレゼンテーションをするのはとても緊張したけれど、しっか り練習をして発表することが出来たので良かったです。

フィリピンの方々のプレゼンテーションも聞いて、それぞれの国の課題とどうすれば改善できるのかについてみんなでしっかりと考えることが出来たので本当に良かったです。

3つ目はフィリピンの病院を訪れて、ハンセン病について学んだことです。今までハンセン病については日本でも学んだことがありましたが、あまり詳しくは知りませんでした。実際に病院に行き、ハンセン病について学んだことで、ハンセン病の患者さんへの理解がより深まり、ハンセン病患者さんへの差別はハンセン病について詳しく知らないことから生まれてしまうことが分かったので、フィリピンの病院で学んだハンセン病について身近な人に話していき、少しでも患者さんへの差別を無くしていきたいと強く思いました。

フィリピンの方々は本当にフレンドリーで初めてであった私たちに対しても最大のおもてなしをして下さいました。私は元々人前に出るのも人に自分の意見を話すのも苦手でしたが、このキャンプで自分の殻を破って自己を表現したことで、自分の苦手だった人前に出ること、自分の意見を話すことが出来たので本当にいい体験ができました。日本に帰ってきた今でもフィリピンで一緒に活動した方々はかけがえのない友達です。このキャンプで新しい自分、新しい仲間と出会えたことは一生忘れません。

